



図74 上から見た木柱群

発掘調査が行われた矢垂川の氾濫原は、湿った土壌であったため、通常の遺跡では腐って残らないような、木造の遺構や植物性の遺物が良好な状態で残されていた。平成六年の調査では、三五〇平方メートルの調査範囲から八八本の木柱群が見つかった。柱の直径は二〇センチメートルから五〇センチメートル台が一般的で、大半はクリの木であった。調査範



図73 遺跡の位置
5万分1地形図「弥彦」

御井戸A遺跡 西蒲区福井

角田山南麓の福井に、螢の川として知られる矢垂川が流れている。御井戸A遺跡は、矢垂川の氾濫原と一段高い台地にまたがっている。台地区域における遺跡の範囲は、既に宅地化が進んでいるため明らかでないが、低地の区域については東西一五〇メートルほどの広がり確認できる。

平成三（一九九一）年と六年に矢垂川の改修に伴う発掘調査、十三年と十四年に遺跡の保存を目的とした発掘調査を巻町教育委員会が行い、縄文時代晚期（約二五〇〇～二三〇〇年前）の集落の跡であることが分かった。

発掘調査が行われた矢垂川の氾濫原は、湿った土壌であつ



図76 トチの殻の密集出土



図75 刳物(新潟市指定文化財)の出土状態



図77 クルミの密集出土

囲が狭かったため、柱の配列に明確な規則性を見出すことはできなかったが、単独で立っている柱もあることから、木柱群には、大形の住居の柱と、祭祀さいしの時に使われた柱が混じっているようである。木柱群に隣接した場所からは、大小の樹木が折り重なって出土した。この中には人為的に置かれた状態の木製の容器や、未完成の皿も含まれていた。これらは、矢垂川の浸食でできた窪地くぼちに密集しており、木材を加工しやすい堅さにするために、水漬けにした貯木場の跡と考えられる。

また、矢垂川の氾濫原は、木の実の殻の捨て場としても利用されていた。捨てられた殻で圧倒的に多いのはトチの実であった。実が小さくて味覚も劣るドングリは、トチの代用食として利用されていたようである。大量のクルミも貯蔵されていた。図七七はクルミを一一〇〇個余り貯えた施設で、氾濫原の一面にあった。縄文時代における食糧事情の一端がうかがえる。